異郷と境界と物語空間

－『源氏物語』須磨の暴風雨の場面の分析から－

金 秀 美*
soomikim7@hanmail.net

Contents

一 はじめに
二 須磨の海の空間表現－『竹取物語』との類似－
三 須磨の海の空間表現－『浦島子伝』との類似－
四 三月一日の禊－源氏の海への移動と自覚－
五 須磨の空間の変換－明石の「世界」と繋がる空間－
六 おわりに

Abstract

本稿は、『源氏物語』の物語空間を解明する作業の一環として、須磨における暴風雨の場面を取り上げ、その空間表現に焦点を当てて考察したものである。

この暴風雨の場面には、海の空間表現が繰り返し登場する。従来この海の存在については、主に明石と関連づけてその性格や意味が論じられてきたが、ここでは、この暴風雨が実際須磨の空間での出来事であることに注目し、海の要素が須磨に登場する意義を,『竹取物語』や『浦島子伝』という先行作品と関わらせて検討してみた。

この両作品に見える海の空間は、異郷との媒介・境界という属性が看取できるが、そのような海の属性は、源氏が明石に入る前の空間、須磨と重なりを持つ。即ち、須磨は、その海の空間表現を基底に置くことによって、現実の物語世界に、異郷との境界という意味合いを同時に現出させ、明石と繋がる新たな物語空間として再配置されるのである。又、ここでの須磨の空間の変貌は、源氏の状況が変わることを表現しており、明石への移動という物語の展開と緊密に関わるものである。このように、本稿は、須磨における空間表現を分析することによって、現実を舞台とする『源氏物語』のテクストの中で、異郷との境界という須磨の属性がどのように描出されているのかを検討し、物語の進展に従い、多様なイメージや意味合いを有する物語空間の在り方を捉えようとした試みの一つである。

Key Words ：物語空間、空間表現、境界、海、移動

＊ 早稲田大学大学院 博士課程

一 はじめに

異郷論は、折口信夫氏により提唱され、藤井貞和氏により物語研究に導入されて以来、『源氏物語』研究においても、非日常的な空間、非現実的な世界を把握するための有効な概念として取り上げられてきた。

そもそも 『源氏物語』における異郷とは何か。関根賢司氏は、『源氏物語』において「世界」という語で表現された須磨、明石、筑紫、常陸等の用例を検討し、「『世界』は、とりも直さず、『異郷』であり、同時にさすらう存在としての人間の、漂白流離の舞台」と指摘する1)。この関根氏の見解に対して、日向一雅氏は、これでは、異郷の意味は比喩的に広がりすぎると批判し、異郷を、折口氏の他界観念を用いて、福寿の楽土、鬼物の棲息地(神の世界、死の国、隠れ里をも含む)という呪力を秘めた世界と規定する。又 『源氏物語』においては、明石と六条院がそれに相当するとし、須磨、筑紫、宇治の地は異郷の影を漂っていても、異郷の呪術的構造を失くしていると指摘する2)。

このように、従来の研究における 『源氏物語』の異郷の範囲は曖昧であり、多様に解釈されていることは、『源氏物語』の舞台が現実の日本の国に限定されていることと密接に関わっているようである。『源氏物語』では、『うつほ物語』の俊蔭訪問譚や 『浜松中納言物語』の渡唐譚のように、異郷がそのまま物語の舞台となり、主人公がそこに往来するようなことは書かれていない。ということは、『源氏物語』における異郷は、厳密に言えば、異郷そのものではなく、現実と交錯する比喩的な異郷であり、読者の解釈や基準により、その認定の範囲も流動的になるしかないのである。

そういう実状から考えると、近年異郷に変わって、異界という概念が用いられていることも納得されよう。関根氏は、「異類、異人、死者たちの住まう異郷や他界が、人間の世界とは隔絶している場所を言う静的概念であるのに対して、異界は、もののけや生き霊などの異形のものたちが、そこから日常の中へ不意に闖

1) 関根賢司「かぐや姫とその裔」『物語文学論―源氏物語前後―』(桜楓社、一九八〇・九、pp.25~28)、「異郷」『源氏物語必携Ⅱ』(學燈社、一九八二・二、pp.144~145)
2) 日向一雅「源氏物語と異郷」『源氏物語の王権と流離』(新典社、一九八九・十、pp.176~183)

入してくる場所を言う動的概念」[3]と規定し、『源氏物語事典』の「異界」項(小嶋菜温子氏執筆)も、異界は此界と相互に交換可能な反転構造をなしていると指摘する[4]。このように、この世に不意に入ってきたり、相互交通可能であったりする異界の概念は、現実世界を舞台とする『源氏物語』を論じる上で確かに有効な概念であろう。

しかし、異郷訪問譚の構造を有していると言われる須磨・明石の物語の場合、異界という概念のみでは、主人公の越境という、物語において重要な意味がかえって捉えにくくなるのではなかろうか。源氏が明石という地を訪問し、そこで明石君と結ばれ、京に帰還するという物語においては、源氏がこの世と峻別される異郷へと越境すること、即ちその移動そのものが重要なポイントになるはずである。とすると、その明石に行く前の空間、異郷への越境の問題が集約されている境界の地、須磨を論議の中心に置くことは、物語空間における異郷、境界の様態を解読するよい材料になると思われる。

異郷訪問譚の構造の中で、須磨の空間が異郷とこの世との境界の属性を有していることは、既に先行研究により指摘されてきた。藤井貞和氏は、須磨を畿内、明石を畿外とし、須磨を「異郷への出口、異郷のものが迎えに来たり、それと出会ったりする過渡地」と把握する[5]。更に、東原伸明氏は、藤井氏の二項対立の図式から、畿内/境界/畿外という三項図式を提示し、須磨と明石は畿内、畿外であると同時に、境界の地という属性を持つ両義的な空間と把握する。東原氏の論は、主に明石の境界性の究明に重点が置かれているが、須磨の境界性については、「スミ(隅)と同一義のツマ(端)に通じ、『須磨の関』を隔てとする畿内のツマ(スマ)＝末端(周縁)」と理解されると指摘し、小林茂美氏の説を用いて、その地名の語源論的解釈から説明をしている[6]。このように、従来の論において、須磨の空間の境界性に関する指摘は、図式的、記号的な把握の場合が多く、物語内

3) 関根賢司「源氏物語と異界」『国文学』(學燈社、一九九五・二、pp.116～117)
4) 小嶋菜温子「異界」『源氏物語事典』(大和書房、二〇〇二・五、p.46)
5) 藤井貞和「うたの挫折―明石の君試論―」『源氏物語及び以後の物語研究と資料』(武蔵野書院、一九七九・十二、pp.71～74)
6) 東原伸明「源氏物語と＜明石＞の力―外部・龍宮・六条院」(『物語研究』第二集、新時代社、一九八八・八、pp.219～226)

容に密着した論究は、さほど厳密に追究されてこなかったように思われる。

では、現実を舞台とする『源氏物語』のテクストの中で、須磨の空間はどのように描かれているのだろうか。本稿は、須磨の空間が、異郷とこの世との境界の属性を有していることを、本文内容の分析を通して検討していきたい。特に、須磨の暴風雨場面を取り上げ、物語における須磨という空間の描き方を検討することによって、異郷、境界、物語空間という問題を再考する機としたい。

二 須磨の海の空間表現 -『竹取物語』との類似 -

須磨での暴風雨の場面が、『竹取物語』の大伴の大納言が竜の頸の玉を求める部分と酷似していることは、既に先学により明らかになっている。関根賢司氏は、須磨、明石巻の暴風雨の場面に、海のイメージが繰り広げられていることに注目し、「『竹取物語』と『源氏物語』とは、＜海＞を共有することによって、＜明石＞と＜竜＞と＜雷＞とを共有」すると指摘する7)。又、東原氏は、大伴大納言が暴風雨に翻弄されて明石に流されたごとく、源氏は暴風雨によって明石へ移動しており、両作品における「＜明石＞は人間の世界からみても、あるいはまた龍の世界からみても、お互いが交換可能な両義的な中間地帯」と指摘する8)。このように、両作品の関わりを論究する際、海という存在は、主に明石の地と関連づけて把握されてきた。又「海龍王の后になるべきいつきむすめ」(若紫巻二〇四頁)や「海の底にも入りなむ」(須磨巻二一二頁)等の本文の記述からも、海は明石の一族や明石に結び付けて捉えられる。

しかし、須磨・明石巻での暴風雨は、実際須磨の空間での出来事であることを想起したい。とすると、ここで登場する海の要素を、須磨の空間と関連づけて考察する必要があるのではなかろうか。本節では、『竹取物語』の暴風雨の場面に見られる海の空間の様相を、須磨の空間表現と関わらせて比較検討することと

7) 関根賢司「表現機構論への試み—須磨明石前後—」『物語文学論—源氏物語前後—』(桜楓社、一九八〇・九、pp.168～171)
8) 東原伸明、前掲論文、pp.227～231

する。

（A）船に乗りて、海ごとに歩きたまふに、いと遠くて、筑紫の方の海に漕ぎいでたまひぬ。

いかがしけむ、疾き風吹きて、世界暗がりて、船を吹きもて歩く。いづれの方とも知らず、船を海中にまかり入りぬべく吹き廻して、浪は船にうちかけつつ巻き入れ、雷は落ちかかるやうにひらめきかかるに、

（B）大納言心惑ひて、「まだ、かかるわびしき目、見ず。いかならむとするぞ」とのたまふ。

楫取答へて申す、「ここら船に乗りてまかり歩くに、まだかかるわびしき目を見ず。御船海の底に入らずは、雷落ちかかりぬべし。もし、幸に神の助けあらば、南海に吹かれおはしぬべし。…」と楫取泣く。

（C）楫取答へて申す、「神ならねば、何わざをか仕うまつらむ。①風吹き、浪激しけれども、雷さへ頂に落ちかかるやうなるは、龍を殺さむと求めたまへばあるなり。疾風も、龍の吹かするなり。はや神にいのりたまへ」といふ。

「よきことなり」とて、「②楫取の御神聞しめせ。をぢなく、心幼く、龍を殺さむと思ひけ今より後は、毛の一筋をだに動かしたてまつらじ」と、…千度ばかり申したまふる験にやあらむ、やうやう雷鳴りやみぬ。…楫取のいはく、「これは、龍のしわざにこそありけれ。この吹く風は、よき方の風なり。悪しき方の風にはあらず。よき方に面向きて吹くなり」…

三四日吹きて、吹き返し寄せたり。浜を見れば、播磨の明石の浜なりけり。(四五～四七頁)[9]

事件は、本文(A)のように、大伴大納言が龍の頸の玉を取るため、自ら船に乗って海に出てゆくことから始まる。大納言はその海の中で不意に暴風雨と遭遇する。風、波、雷が揃って猛威を振るう暴風雨により、船が沈没しそうな緊迫した状況が描かれている。(B)では、傍線部のように、この暴風雨が異常な事件であることが示され、大納言と船人の当惑する姿が描かれる。又(C)では、①の楫取の言葉により、この暴風雨が龍の仕業であることが明らかにされ、大納言が神の助けを求める様子②が語られる。その「楫取の御神」(海神)への祈りにより暴

9)『竹取物語』の本文引用は、『新編日本古典文学全集』(小学館、一九九四・十二)による。適宜傍線・記号を付した。

風雨は沈静し、「よき方の風」が吹いて「播磨の明石の浜」に漂着するのである。

このように、海中で暴風雨に遭遇した時、海の神の助けにより嵐が沈静することは、単に『竹取物語』のみならず、遣唐使の航海の記事からも確認することができる。

『叡山大師傳』[10]

二十三年秋七月。上第二舶。直指西方。(a)於滄海中。卒起黒風。侵船異常。諸人懐悲。無有恃生。於是。和上発種種願。起大悲心。(b)所持舎利施海竜王。忽息悪風。始扇順風。未久著岸。

『入唐求法巡礼行記』(開成四年六月五日)[11]

五日、遅明。(c)懸帆進行。…雲聚忽迎来。逆風急吹、張帆頓変。…北方有雷声。掣雲鳴来。船上官人驚怕殊甚。(d)猶疑冥神不和之相。同共発願兼解除、祀祠船上霹靂神。又祭船上住吉大神。又為本国八幡等大神及海龍王…各発誓願。雷鳴漸止。

『叡山大師傳』の記事をみると、(a)航海の途中、突然暴風が起きて、舟が沈没しようとする時、(b)舎利を持って海竜王に施したら悪風がおさまった、とある。又、『入唐求法巡礼行記』の円仁が書いた唐への航海の記事(八三九年)にも、(c)のように不意に嵐と会った時、(d)霹靂神を祈った後に、住吉の神、八幡等の大神、海龍王に発願することによって嵐がおさまった、という話が載せられている。このように、海で遭遇した暴風雨を海の神の出来事と認識し、海の神に祈るべきだと見るのは、当時の人々の一般的な考えだったらしい。

このように、不意に起きた暴風雨を異常な事件として、或いは、海の神の領域で起きた事件としているのは、『源氏物語』も同様である。しかし、『源氏物語』の場合、源氏が天変に遭ったのは、海の中でも、海上の船の中でもない。須磨の暴風雨は、三月巳上の日、源氏が海岸で禊を行う途中、突然襲来する。

---

10)『叡山大師傳』の本文引用は、旧版『傳教大師全集』別巻(天台宗宗典刊行会、一九一二・十二、p.89)による。

11)『入唐求法巡礼行記』の本文引用は、小野勝年 『入唐求法巡礼行記の研究 第二巻』(鈴木学術財団、一九六六・二、pp.47～48)による。

(一) にはかに風吹き出でて、空もかきくれぬ。御祓もしはてず、立ち騒ぎたり。…よろづ吹き散らし、またなき風なり。波いといかめしう立ちきて人々の足をそらなり。海の面は、衾を張りたらむやうに光り満ちて、雷鳴りひらめく。落ちかかる心地して、からうじてたどりきて、(a)「かかる目は、見ずもあるかな」「風などは、吹くも気色づきてこそあれ。あさましうめづらかなり」とまどふに、なほやまず鳴りみちて、雨の脚、当たる所徹りぬべくはらめき落つ。(須磨巻二一七～二一八頁)[12]

(二)「(b)住吉の神、近き境を鎮め護りたまふ。まことに迹を垂れたまふ神ならば助けたまへ」と、多くの大願を立てたまふ。おのおのみづからの命をばさるものにて、かかる御身のまたなき例に沈みたまひぬべきことのいみじう悲しきに、心を起こして、すこしものおぼゆるかぎりは、身に代へてこの御身ひとつを救ひたてまつらむととよみて、もろ声に仏神を念じたてまつる。…御社の方に向きてさまざまの願を立てたまふ。(c)また海の中の竜王、よろづの神たちに願を立てさせたまふに、いよいよ鳴りとどろきて、おはしますに続きたる廊に落ちかかりぬ。背後の方なる大炊殿と思しき屋に移したてまつりて、上下となく立ちこみて、いとらうがはしく、泣きとよむ声雷にもおとらず。空は墨をすりたるやうにて日も暮れにけり。(明石巻二二六～二二七頁)

(三)「この風いましばし止まざらましかば、潮上りて残る所なからまし。神の助けおろかならざりけり」と言ふを聞きたまふも、いと心細しと言へばおろかなり。

(d) 海にます神のたすけにかからずは潮のやほあひにさすらへなまし(明石巻二二八頁)

本文(一)を見ると、風、雨、波、雷、海等の自然の力を感じさせる要素が揃って現れており、傍線部(a)のように、この暴風雨が異常な事件であることが示され、人々の動揺が描かれる。源氏が天変に遭った場所は、自分が立っている海づらであるが、暴風雨と高波は海から海岸の方へ寄せて来るものであるから、この天変は単に海づらでの出来事ではなく、それと繋がる海がそれを起こさせる原動力となっていたのであろう。即ち、海という空間が恐ろしい力を持った空間として変貌し、源氏の目を通して見られる対象から、源氏の意識を超越する能動的な

12) 以下、本文引用は、『新編日本古典文学全集源氏物語』(小学館、一九九四～一九九八)による。適宜傍線・記号を付した。

空間として再配置され、自分の力を源氏の方へさし向けてくる存在へと変化しているのである。このような不意に現出した海の空間の力の発揮は、源氏が山里の家へ戻ってきた後にも続けられる。

次第に激しくなる暴風雨の猛威に、「のどやかに経をうち誦じておはす」という源氏の最初の態度は、本文(二)の(b)(c)のように、積極的に願を立てる姿へと変わっていく。その祈りの対象として挙げられている神の名称は、「住吉の神」「海の中の竜王」「よろづの神たち」である。いづれも海と係わる存在である。又本文(三)の源氏が詠んだ和歌(d)を見ると、「海にます神」の助けによって嵐が鎮静したことへの感謝の念が示されており、源氏はこの事件に戸惑いながらも、それが海の力であることを体得していくようである。

特に、(二)(三)における「海の中の竜王」、「海にます神」という神の呼びかけが、「海」の空間性を喚起する言語により紡がれていることが注意される。この「海にます神」については、『花鳥余情』が、住吉明神と海の中の竜王との両方の存在を挙げている[13]が、柳井滋氏は、特定の神を想起させる表現ではなく、広く海にある神を漠然と指しているもの、住吉・竜王・海にますよろづの神たちを指す言葉と解釈する[14]。即ち、この表現は、源氏がいる須磨の空間が海の神の領域であることを示すものであり、それを源氏自身が認めているのである。又「海の中の龍王」の語も同様である。これは、若紫巻で登場した海龍王の異称であろうが、海龍王と称される時より、このように表現を改めることで、海の中にいる存在という空間性が際立つ効果を出している。この「海の中の竜王」は、単に源氏の言葉の中での神の呼称として出てくるのではなく、その海の空間からやってきた異形のものの出現により、更に物語世界において海の空間の存在が具現化される。

---

13) 『花鳥余情』には「住吉明神はつくしのたちはなの水戸のしほちよりうかひ出給へる神なるによりて海にます神とは申侍り又海の中の竜王に願をたてたまふよし上にあれは竜王ヲもか見といはんに相違あるましき」と記す(中野幸一編『源氏物語古註釈叢刊 第二巻』(武蔵野書院、一九七八・十二、p.108)。

14) 柳井滋「源氏物語と霊験譚の交渉」『源氏物語研究と資料—古代文学論叢第一輯—』(武蔵野書院、一九六九・六、pp.189～191)

(四) 君もいささか寝入りたまへれば、(a)そのさまとも見えぬ人来て、「など、(b)宮より召しあるには参りたまはぬ」とて、たどり歩くと見るに、おどろきて、さは(c)海の中の竜王の、いといたうものめでするものにて、見入れたるなりけりと思すに、いとものむつかしう、この住まひたへがたく思しなりぬ。(須磨巻二一八～二一九頁)

本文(四)は、暴風雨が小康状態となった時、源氏が夢を見る場面である。この「そのさまとも見えぬ人」の存在の出現は、当該箇所一回に止まるのではなく、「御夢にも、ただ同じさまなる物のみ来つつ、まつはしきこゆと見たまふ」(明石巻二二三頁)のように、続いて源氏の夢を通して、須磨の空間に潜入してくる。海の空間にいる存在が、須磨の空間へ現れてくるのである。

当該箇所の(a)「そのさまとも見えぬ人」については、阿部秋生氏が「住吉の神、乃至はその神意を傳へ来た者」[15]と解釈して以来、多くの論がこの観点に従ってきた。その場合、(b)の「宮」も「海神である住吉の神殿」[16]と解され、源氏がそれを(c)「海竜王」の宮殿だと考えたのは、源氏の邪推と理解される。それに対して、『細流抄』が、(b)の所に「竜宮よりのこと也」[17]と注するように、(c)「海の中の竜王」と関連して竜王の宮殿と解する見方もある。このように、(a)の異形のものを、住吉神の使者、海龍王の使者のどちらに解釈するかは、この暴風雨や源氏の明石移住に働く神威の把握と関わる重要な問題として、従来取り上げられてきた[18]。が、ここでは、本文の中で住吉の神、海の中の竜王、異形のものという存在が海の空間を通して各々登場し、それらの超自然的な力、或いは神の力というのが、海の空間に統括されていることに注目したい。特に、それらの海の空間の存在の力によって、源氏の明石への移住することとなるのである。

---

15) 阿部秋生『源氏物語研究序説』(東京大学出版会、一九五九・四、p.607)
16) 『新編日本古典文学全集源氏物語』の頭注、p.218
17) 伊井春樹編『源氏物語古注集成第７巻 細流抄』(桜楓社、一九八〇・十一、p.125)
18) 阿部氏は、住吉神が水神・海神として信仰されてきた事実から、同一な存在として解し、この暴風雨や源氏の明石への移住がすべて住吉神の神意によるものと指摘する(前掲論文、p.607)。それに対して、柳井滋氏は、住吉神は明石への移住に、海竜王は源氏を滅す力としての働きがあり、各々の霊威を発揮するものと解する(前掲論文、pp.89～191)。又、石原昭平氏は、住吉神は、王権儀礼に関わる神として、源氏の鎮魂に関わり、海龍王は水中王者の化身として冥界の桐壺帝を招く役割を果たすものとして把握する(「海龍王と住吉神―海龍王となった大王をめぐる―」『むらさき』、武蔵野書院、一九八九・七、pp.67～70)

このように、『源氏物語』と『竹取物語』とは、異常な暴風雨による人々の動揺、海の神への祈りとそれによる暴風雨の沈静、不思議な風による明石への到着という同じ展開を見せているが、そのような『竹取物語』における神の影響圏、明石と繋がる境界という海の空間の属性は、他ならぬ須磨の空間と重ねて看取しうるものになっているのである。

三 須磨の海の空間表現 -『浦島子伝』との類似 -

さて、海が異郷と繋がる境界の空間として登場するのは、『浦島子伝』でその先蹤を見ることができる。つとに石川徹氏は、須磨・明石の物語が竜宮訪問譚という神話の世界を想起させるものと指摘し、その例として浦島伝説と海幸山幸の話を挙げる19)。又、高橋亨氏は、源氏の流離と帰京を「浦島型」の話型として把握し、〔現世：境界：異郷〕と図式化している20)。このように話型の枠組として捉えられた両作品の関係を、本節では、テクストにおける表現、特に須磨の空間表現に密着して考察することとする。『浦島子伝』の本文としては、『源氏物語』と表現がより近いとされる「丹後国風土記」を対象にする。

（A）長谷朝倉宮御宇天皇御世。嶋子独乗小船汎出海中為釣。経三日三夜不得一魚。乃得五色亀。心思奇異。置干船中。

（B）即寝。忽為婦人。其容美麗更不可比。嶋子問曰。人宅遙遠。海庭人乏。拒人忽来。女娘微咲。對曰風流之士独汎蒼海。不勝近談。就風雲来。嶋子復問曰。風雲何処来。女娘答曰。天上仙家之人也。請君勿疑。乗相談之愛。爰嶋子知神女。鎮懼疑心。…

（C）女娘曰。君宜廻棹赴干蓬山。嶋子従往。

（D）女娘教令眠目。即不意之間。至海中博大之嶋。

（E）其地如敷玉。闕臺輝映。樓堂玲瓏。目所不見。耳所不聞。携手徐行。到一

19) 石川徹「光源氏須磨流謫の構想の源泉について―日本紀の御局新考―」『国語国文學報』(一九六〇・十一、p.3)

20) 高橋亨「物語学にむけて－構造と意味の主題的な変換」『物語の方法－語りの意味論』(世界思想社、一九九二・四、pp.6～8)

太宅之門。

（前田育徳会尊経閣文庫編刊　『釈日本紀』巻一二収）[21]

まず、本文（A）を見ると、海に出て、三日という時間の経過が示されていて、「海の中」が事件の場となる。その海で流離っていた浦島子は、（B）の傍線部のように、夢の中で異形のものと出会う。彼女は「天上仙家の人」と名乗る異郷の存在である。又（C）仙女は棹をめぐらして蓬山に往くように言い、浦島子がそれに従って、蓬山に着くという展開となる。このように、夢の中で「この世」の人ではなく、異郷の人が登場し、主人公と接している点は『源氏物語』と一致する。

（五）「(a)住吉の神の導きたまふままに、はや舟出してこの浦を去りね」…「…我は位に在りし時、過つことなかりしかど、おのづから犯しありければ、その罪を終ふるほど暇なくて、(b)この世をかへりみざりつれど、いみじき愁へに沈むを見るにたへがたくて、(c)海に入り、渚に上り、いたく困じにたれど、かかるついでに内裏に奏すべきことあるによりなむ急ぎ上りぬる」とて立ち去りたまひぬ。（明石巻二二九頁）

暴風雨がおさまった後、源氏が夢を見る場面で、桐壺院の亡霊が登場する。桐壺院の言葉によると、桐壺院の居所は、(b)「この世」に対しての「あの世」にあり、そこから(c)「海に入り、渚を上」る経路を通してここに到着したと言う。この記述によると、海は「この世」と「あの世」の通路の役割を担う媒介の空間であり、ここで「この世」であった須磨の空間が「あの世」と繋がる境界、異郷のものが往来できる非日常的な空間へと変貌するのである。

又、『浦島子伝』で、仙女が主人公の夢の中に現れ、（C）「君宜廻棹赴干蓬山」と、浦島子に行くべき方向を提示し、浦島子がそれに従って異郷に辿り着くことは、桐壺院が夢の中で(a)「住吉の神の導きたまふままに、はや船出してこの浦を去りね」と示した方向に源氏が従い、舟に乗って明石に移ったことと一致する。

21）本文引用は、重松明久著　『古典文庫浦島子伝』(現代思潮社刊、一九八一・一、p.8)による。

（六）例の風出で来て、飛ぶやうに明石に着きたまひぬ。ただ這ひ渡るほどに、片時の間と言へど、なほあやしきまで見ゆる風の心なり。(明石巻二三三頁)

（七）(a)浜のさま、げにいと心ことなり。…舟より御車に奉り移るほど、(b)日やうやうさし上りて、…月日の光を手に得たてまつりたる心地して、営み仕うまつることことわりなり。所のさまをばさらにもいはず、つくりなしたる心ばへ、木立立石前栽などのありさま、えもいはぬ入江の水など、絵にかかば、心のいたり少なからん絵師は描き及ぶまじと見ゆ。月ごろの御住まひよりは、こよなく明らかに、なつかしき御しつらひなどえならずして、(c)住まひけるさまなど、げに都のやむごとなき所に異ならず、艶にまばゆきさまは、まさりぎまにぞ見ゆる。(明石巻二三三～二三五頁)

『浦島子伝』で、浦島子が「常の世」に行く道程の描写は、本文(D)「即不意之間。至海中博大之嶋」となっており、風の異常な速さによる神秘性が示されている。それは、本文(六)で確認されるように、源氏の須磨から明石への移動の描写に、自然現象とは思われない風の速さ、異常さが語られていることと類似する。即ち、ここでの源氏の移動は、単なる地理的移転ではなく、まるで浦島子が異郷に入る時のような雰囲気を漂わせているのである。

更に、浦島子が到着した異郷は、(E)の「目所不見。耳所不聞」という普通の人間には体験できない珍しさと共に、「其地如敷玉。闕臺輝映。樓堂玲瓏」という華麗で明るいイメージとして描かれる。それは源氏が明石に到着した時の叙述に、(七)の(a)他の所と異なる地の風情の描写と、(b)(c)の明るい地のイメージ、眩しいほど華やかな地の印象と類似するものである。

このように、『浦島子伝』での、異郷と繋がる境界の空間、異郷の者と接触する空間としての海の性格は、須磨の空間と重なりを持つものである。言い換えれば、『浦島子伝』のような異郷に入る境界という海の空間の属性が、須磨の地と重なり合うことによって、須磨もそのような性格を帯びていく空間となっていると考えられる。

四 三月一日の禊-源氏の海への移動と自覚-

海、浪風、潮、雷、舟、海にます神、住吉の神、海の中の竜王、海を潜ってきた桐壺院の亡霊等々…。このように須磨に繰り返し登場する海の空間の要素は、『竹取物語』や『浦島子伝』のような非日常的な空間、異郷の世界を想起させる空間表現であり、それらによって、源氏のいる須磨の空間は非日常的な空間へと変貌していく様相を辿ってみた。

が、ここで注意すべきことは、『竹取物語』と『浦島伝』での空間は、あくまでも海の中ということである。大伴大納言が舟に乗って筑紫の方の海に漕ぎ出て、海中にいたことは、この事件の空間的場所を示すと同時に、この珍しい事件と遭遇する一つの条件にもなっている。即ち、海の中、神の領域である海にいたからこそ、神、竜の仕業である暴風雨に翻弄されることができたのである。又、浦島子の場合も、「人宅遙遠。海庭人乏」「風流之士独汎蒼海」というふうに、浦島子が独り海の中にさすらうことは、仙女と遭う契機となっており、海の空間は異形の者と会える空間として設定されている。

しかし、『源氏物語』において、源氏が暴風雨と遭遇するのは、禊をするため出かけた海づらであり、その嵐を避けて戻ってきた山中の住まいであった。

（八）おはすべき所は、行平の中納言の藻塩たれつつわびける家居近きわたりなりけり。海づらはやや入りて、あはれにすごげなる山中なり。垣のさまよりはじめてめづらかに見たまふ。（須磨巻一八七～一八八頁）

まず、須磨での源氏の住まいの位置を確認してみると、本文(八)のように、在原行平が須磨に籠居した時の侘び住まいの近くに住処を定め、実際の生活場所は海から離れた山中に設けている。この海と隔てられた源氏の須磨での住まいについて、藤井貞和氏は、「自然的に、とは丘脈がそこに海へ突き出ておのずから関(=塞き・堰き)になっている。この丘脈は山につらなり、格好の隠棲地たるべく、源氏はそこに山荘をかまえたのだ。在原行平もまた、須磨の関のそとへ出たのではなかろう。皇族は畿内の地から外へ出てはならないという規制もあるとか

いう」と指摘する22)。平安末に閉止された須磨の関の位置、実態は現在未詳のままである。が、藤井氏の指摘のように、物語において山という自然の位置が一種の関、隔ての働きがあり、源氏が畿内のぎりぎりまでの所に居場所を設け、海と隔てられた山中に籠もっていたことは、源氏の政治的無罪の主張という、物語の意味合いが込められていたのである。実際、初めて須磨の海岸に到着してから、次の年の三月一日に禊をするため海岸に出かけるまでの、ほぼ一年間の須磨での生活の中で、源氏の海への外出に関する言及は見えない。海と源氏が住む山中とは、「海づらはやや入りて」「海はすこし遠」いという本文に示される「地理的距離」よりも、源氏の感覚としては更に「遠い」ものとして感じられていたようである。しかし、その山中に籠もっていた源氏がその山中の住まいから海づらへ移動していることが注目される。

(九) 弥生の朔日に出で来たる巳の日、「今日なむ、かく思すことある人は、禊したまふべき」と、なまさかしき人の聞こゆれば、(a)海づらもゆかしうて出でたまふ。いとおろそかに、軟障ばかりを引きめぐらして、この国に通ひける陰陽師召して、祓せさせたまふ。(b)舟にことごとしき人形のせて流すを見たまふにも、よそへられて、

(c) 知らざりし大海の原に流れきてひとかたにやはものは悲しき

…海の面うらうらとなぎわたりて、行く方もしらぬに、来し方行く先思しつづけられて、

(d) 八百よろづ神もあはれと思ふらむ犯せる罪のそれとなければ(須磨巻二一七頁)

ここでの源氏の移動は、物知りの禊の誘いによるものであるが、源氏がそれを承諾する理由は(a)「海づらもゆかしうて」であった。この記述に関しては、禊に対する源氏のいい加減な態度と評される。が、このさり気ない、気楽であるかのように語られる源氏の移動は、実は、須磨に到着してから初めて源氏が海に赴いたものであり、源氏が自ら海に関心を示し、接近しようとしたものである。又、前述したように、源氏が海と隔てられた山中の住まいに籠もっていたことに、政

22) 藤井貞和、前掲論文、p.71

治的無罪の主張という意味合いが込められていたことと合わせて考えると、その山中から海へ出る源氏の行動は、今までの境涯から何らかの変化を促す契機になっているのではなかろうか。

その海づらで、源氏は祓えの人形を舟に乗せて流す儀式を行う。先行研究において、この上巳の禊祓は、『河海抄』が「漢代ニハ三月上巳日百官東流水上にして禊飲す」[23]と注するように、中国の風習からその典拠が求められてきた。又、阿部好臣氏により、日本の大祓詞の表現との類似性が確認され[24]、河添房江氏により、王権形成を論ずる立場から大嘗祭との関わりが論究される[25]。が、本稿では、その禊祓を行う場が海づら、明石と繋がる海岸である意味を掘り下げて考えたい。

この行事は、「なまさかしき人」の言葉では「禊」と示され、その現場においては「祓」と称される。禊とは「穢れを洗い清める」ものであり、祓は「罪を除き捨て清める」ものであるが、既に奈良時代に入って両者は区別されなくなったという。が、ここで禊と祓との各々の性格を分析した三橋健氏の意見[26]に注目しておきたい。三橋氏は、禊には水が必要条件であり、「常世の変若水(復水・若水)」、即ち、その再生の「水を浴びながら、裸身を振り動かし、外来の威霊をしっかり触りつけ、発動せしめるという呪術行為が、ほかならぬ『禊』」であったと言う。特に、その禊の場として「常世の変若水を裸身に浴びるといえば、その最適地は常世波の打ちよせる海岸である」と指摘する。即ち、源氏の禊祓をする海岸は、他ならぬ常世波が打ち寄せる場所であり、ここで源氏はその海岸と繋がる常世と向かっていることになる。

更に、この場面における源氏の心情や歌においても、源氏と海の空間との結びつきが強調される。源氏は、(九)の(b)のように、海の中に流れていく「人形」を眺めながら、自分の身をたとえ、(c)の歌を詠む。ここでは、小林正明氏が、「供

---

23) 玉上琢彌編　『紫明抄・河海抄』(角川書店、一九六八・六、p.319)
24) 阿部好臣「源氏物語の朱雀院を考える―序章・王権を越えるもの―」『日本文学』(一九八九・三、pp.1～13)
25) 河添房江「須磨から明石へ」『源氏物語表現史：喩と王権の位相』(翰林書房、一九九八・三、pp.345～374)
26) 三橋健「年中行事における禊・祓・物忌み」『日本民族研究大系第3巻』(国学院大学、一九八三・五、pp.275～279)

犠の磁場においては人形と人間とが相互に変換しうる」[27]と指摘するように、源氏がその「人形と自己とを同一視する心的機制」が窺われる。この歌での「知らざりし大海の原」とは、人形が流れていく場であると同時に、源氏がその人形と自身とを同一視する歌の仕掛けによって、自分が流れていく空間として「海」を認識していることになっていると言えよう。とすると、ここでは、『竹取物語』や『浦島子伝』のように、源氏の居場所を「海」とする一種のレトリックがかけられていることになるのではなかろうか。その次に暴風雨が不意に起き、前節で検討したように、須磨は海の空間のような性格を帯びていくのである。

従来、この暴風雨が起きることと絡めて、無実を主張する(d)の歌の方が主に注目されてきた。その際、暴風雨については、神の怒りのあらわれとも、神の感応もしくは救済の徴とも解釈されている。つまり相反する捉え方があるわけだが、ここで見てきたように、(d)の歌とセットになっている(c)の歌も、次の暴風雨の場面での「海の空間」を呼び込む一つのコードになっているのではなかろうか。

五 須磨の空間の変換-明石の「世界」と繋がる空間-

稿者は別稿[28]で、須磨の空間表現には、海づらの表現以外に、山里の印象も窺われることを論じたことがある。そこでは、海づらが源氏の寂しい謫居地を描出しているのに対して、山里は、都人の美意識により享受される美的空間であることを確認し、このように、須磨の地に異なる性格を有する二つの空間が共存することによって、須磨での流謫の心情に没することのない、源氏の風流な生活の一面をも併せて描き出していると論じた。そのような須磨の空間を念頭に置きながら、以後の物語を追ってみると、暴風雨以後の須磨は、暴風雨前の「海づら」「山里」という二つの相を見せた空間の構図が払拭され、海の空間に対置される

27) 小林正明「物語の越境と供犠―『伊勢物語』のばあい―」『日本文学』(一九九五・一、pp.11～20)
28) 拙稿「『源氏物語』における須磨の空間-「海づら」「山里」の空間表現とその機能について-」『日本古代文学と東アジア』(勉誠出版、二〇〇四・三)

ものとなっているのである。

風、潮、波は激しい勢いで源氏の住まいに近寄って、須磨の空間は、「巌も山も残るまじきけしき」「潮上りて残るところなからまし」という状態となる。それは、海の領域の拡大、山里の縮小という、今までの須磨の空間の配置の変化と繋がっている。更に、事件の展開は激しい落雷があって、源氏の御座に近い廊が焼けることとなり、源氏は仕方なく「大炊殿と思しき屋」に移す。それは一部分であるが、今までの源氏の居所であった山里の空間の破壊、源氏の風流な生活の空間の破壊を意味するのであろう。

暴風雨以前の須磨の空間は、畿内の末端、都との隔絶地と言っても、その距離、隔絶によって、むしろ都の世界を常に喚起する、いわば都への視線を保持し続けている空間であった。その「都に結びついた須磨」は、暴風雨の空間表現に、『竹取物語』、『浦島子伝』という先代作品の海の空間表現を基底に置くことによって、「明石へと繋がる須磨」として再配置されていくのである。このように、暴風雨後、須磨が明石へと開かれた空間となっていることは、本文中の「世界」という表現からも窺われる。『源氏物語』中で「世界」という語の初出は、本文(十)の風雨が静まった直後の記述である。

(十) 近き世界に、ものの心を知り、来し方行く先のことうちおぼえ、とやかくやとはかばかしう悟る人もなし。(明石巻二二八頁)

この異常体験の解決法を知って教えてくれる人もない「近き世界」とは、もちろん源氏のいる須磨の地を指す。が、玉上琢彌氏は、「前に『近き世界に物の心しり……悟る人もなし』と、光る源氏はなげいていたのだが、実は近き世界にそのような人物が存したのである」[29]と指摘するように、この「悟る人」とは、以後登場する明石入道を思わせる文章である。即ち、この「近き世界」は、須磨のみならず、これから登場する明石入道と明石への伏線としても機能する言葉と見られる。更に、源氏が明石入道の誘いに応じて、明石へ移ることを決心する場面(十一)、又、源氏が明石に移った後、入道と源氏との対話の場面(十二)(十三)に

29) 玉上琢彌『源氏物語評釈第三巻』(角川書店、一九六五・五、p.171)

も、「世界」という語は集中して現れる。

(十一)「(a)知らぬ世界に、めづらしき愁への限り見つれど、都の方よりとて、言問ひおこする人もなし。ただ行く方なき空の月日の光ばかりを古里の友とながめはべるに、うれしき釣舟をなむ。かの浦に静やかに隠ろふべき隈はべりなんや」とのたまふ。(明石巻二三三頁)

(十二)「…わが君、(b)かうおぼえなき世界に、仮にても移ろひおはしましたるは、もし、年ごろ老法師の祈り申しはべる神仏の憐びおはしまして、しばしのほど御心をも悩ましたてまつるにやとなん思うたまふる。…」(明石巻二四四頁)

(十三)「横さまの罪に当たりて、(c)思ひかけぬ世界に漂ふも、何の罪にかとおぼつかなく思ひつるを、今宵の御物語に聞きあはすれば、げに浅からぬ前の世の契りにこそはとあはれになむ。…」(明石巻二四六頁)

ここで、傍線部(a)は源氏がいる須磨の地を、(b)(c)は須磨から移った明石を指す言葉である。が、これらの知らない、見慣れていない「世界」とは、都人である源氏において、須磨と明石の地を包括するものであろう。又、(c)「思ひかけぬ世界に漂ふ」の表現からも窺われるように、それは、源氏の流離の地、須磨、明石の両空間を指す語と解し得る。

現行の注釈では、「世界」の語を、都とは異なる「地方・田舎」の意として把握する。が、関根賢司氏の指摘通り[30]、「世界」の言葉が、『源氏物語』の中でも須磨、明石、筑紫、常陸に使われて、その以外の地とは結び付いていない事実を考えると、単なる「地方・田舎」を指す言葉というより、流離という特別な語感が込められていることは認めるべきであろう。

もともと、「世界」という語は、仏教用語として「後代、シナの解釈によると、世は遷流の意。界は方位の意」であり、「世は、過去・現在・未来の時間で、界は十方(東西南北・四維・上下)の空間を意味する」[31]ものであって、一般的に日常的空間とは区別される意味合いが込められていた。こうした「世界」という語が、『源氏物語』では特に須磨・明石の空間を指す用語として、天変がおさまった

30) 関根賢司、注(1)の前掲論文、pp.25~28
31) 中村元 『仏教語大辞典』(東京書籍、一九八一・五)の「世界」の解説による。

直後の時点で集中して現れる。ということは、この時点で、「世界」という語の枠組みの中で、須磨と明石との連結を示すことになるのではなかろうか。

このような須磨の空間の変換に際して、テクストの中で、特に源氏の居場所や移動の問題が浮上する。暴風雨の際、「来し方行く先悲しき御ありさまに心強うしもえ思しなさず、いかにせまし、かかりとて都に帰らんことも、まだ世に赦されもなくては、人笑はれなることこそまさらめ、なほこれより深き山をもとめてや跡絶えなまし」(明石巻二二三頁)という本文から窺われるように、この時点で源氏は戸惑いを感じながら、自分の居所を模索している。以後、源氏は、この謎解きのような一連の異常事件を体験しながら、次第に神や明石入道の導きにより、自分の行くべき方向を掴み、明石へ移動していくのである。

この源氏の須磨から明石への移動は、一度失脚したら復帰できない政治状況や畿内から畿外へ出ることを禁止する法制的な側面等、現実の制約に拘束されることであった。そのような現実の制約を越えて、そこから難なく復活する源氏の姿を描く為、物語は非日常的力を発現させる空間として、海の空間を持ち込んでいるのではないだろうか。このように、物語における須磨の空間は、一つの固定したイメージとして描出されるのではなく、物語の展開に従い、多様なイメージや意味性を有するものとしてその相を変じており、物語に符合する空間として再配置されていると言えよう。

六　おわりに

以上、暴風雨の場面における須磨の空間は、『竹取物語』や『浦島子伝』における海の空間表現をその基底に置くことによって、異郷との境界の属性が看取できる空間になっていることを考察してみた。

物語における海は、須磨と明石との媒介空間として登場する。従来、その海での明石海峡(赤石の櫛淵)が、畿内と畿外の仕切る境界として認識されてきた。このような実在した物語空間の配置という観点から考えると、最近、三谷邦明氏が、『源氏物語』一部で、異界・異郷は登場するが、その彼岸と此岸を隔てるのは

境界であって、物語舞台としての境界空間は登場しないと指摘している32)のも首肯できる。三谷氏の指摘通り、海は、須磨と明石の間に存在するものであり、源氏が明石に行く際、舟に乗って通過する空間として僅か物語に登場するのみで、物語展開の舞台・背景として設定されてはいないのである。

しかし、物語に描かれた実際の空間としてではなく、物語の空間表現という側面から考えると、異郷との境界を想起させる先行作品の海の空間表現が、須磨の空間と重なりを持って表現されることによって、須磨は、海の属性が看取できる境界の空間と描出されていると言えよう。前述したように、『源氏物語』は、あくまでも現実の日本国を舞台にする物語である。ということは、物語における異郷は、結局その現実の空間と重なる二重の構造でしか成り立たないことになる。即ち、『源氏物語』では、須磨という現実の土地に、異郷との境界を想起させる海の空間表現を基底に置くことによって、「異郷」「境界」の意味合いを同時に現出させ、新たな物語空間を創出しているのである。それは、源氏が「異郷」というべき明石への越境が行われる直前の時点で、暴風雨による海の要素を集中して物語に登場させることにより、須磨を明石と繋がる空間として再配置していく。このように、須磨・明石物語は、空間表現を通して、現実の物語空間に異郷の意味合いを重ねていく方法によって、物語における異郷と越境を表現し得ているのではなかろうか。

元来、境界は、「隔て」という意味と同時に、「隔て」を破り、「越境」してゆく可能性をも有する両義的空間であった。この須磨という境界の空間も、AとBとの間という地域的な境界の性格と共に、そこに置かれた源氏の行くべき方向が問題視され、そこからの移動により隔ての線を破るという意識(越境)が作用する場所である。即ち、この物語の境界とは、明石海峡という海の彼方にのみ存在するのではない。源氏の行くべき方向が問題視され、明石への移動により、源氏の状況を反転する契機を提供する須磨の空間が、物語における境界空間と言えるのではなかろうか。その移動とは、物語の展開、主人公が物語の中で進展すべき方向と密接に関わっており、ここでの須磨という境界空間は、新たな物語の展開を呼び

32) 三谷邦明「「山里」空間・境界空間からの眼差し—小野と宇治あるいは夕霧巻の不安と宇治十帖の多義性—」『源氏物語の言説』(翰林書房、二〇〇二・五、pp.229~232)

込む空間として機能していると言えよう。

【付記】本稿は、二〇〇三年十二月、外国語大学・早稲田大学共同シンポジウムでの口頭発表(題目：「『源氏物語』における異郷の問題－須磨の暴風雨の場面を中心にして－」)を基に加筆補正したものである。発表に際し、様々なご意見、ご質問を賜った方々にお礼を申し上げる。

참고문헌

阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注(1994～1998)『新編日本古典文学全集 源氏物語』, 小学館, pp.187～235

阿部秋生 (1959)『源氏物語研究序説』, 東京大学出版会, p.607

阿部好臣(1989)「源氏物語の朱雀院を考える―序章・王権を越えるもの―」『日本文学』, pp.1～13

伊井春樹編 (1980)『源氏物語古注集成第7巻 細流抄』, 桜楓社, p.125

石川徹(1960)「光源氏須磨流謫の構想の源泉について―日本紀の御局新考―」『国語国文学報』, p.3

石原昭平(1989)「海龍王と住吉神―海龍王となった大王をめぐる―」『むらさき』, 武蔵野書院, pp.67～70

小野勝年(1966)『入唐求法巡礼行記の研究第二巻』, 鈴木学術財団, pp.47～48

片桐洋一校注(1994)『新編日本古典文学全集竹取物語』, 小学館, pp.45～47

河添房江(1998)「須磨から明石へ」『源氏物語表現史：喩と王権の位相』, 翰林書房, pp.345～374

金秀美(2004)「『源氏物語』における須磨の空間―「海づら」「山里」の空間表現とその機能について―」『日本古代文学と東アジア』, 勉誠出版, pp.445～458

小嶋菜温子(2002)「異界」『源氏物語事典』, 大和書房, p.46

小林正明(1995)「物語の越境と供犠―『伊勢物語』のばあい―」『日本文学』, pp.11～20

重松明久著(1981)『古典文庫浦島子伝』, 現代思潮社刊, p.8

関根賢司(1980)「かぐや姫とその裔」『物語文学論―源氏物語前後―』, 桜楓社, pp.25～28

_____(1980)「表現機構論への試み―須磨明石前後―」『物語文学論―源氏物語前後―』, 桜楓社, pp.168～171

_____(1982)「異郷」『源氏物語必携Ⅱ』, 學燈社, pp.144～145

_____(1995)「源氏物語と異界」『国文学』, 學燈社, pp.116～117

高橋亨(1992)「物語学にむけて－構造と意味の主題的な変換」『物語の方法－語りの意味論』, 世界思想社, pp.6～8
玉上琢彌(1965)『源氏物語評釈第三巻』, 角川書店, p.171
_____編(1968)『紫明抄 · 河海抄』, 角川書店, p.319
中野幸一編(1978)『源氏物語古註釈叢刊 花鳥余情 第二巻』, 武蔵野書院, p.108
中村元(1981)『仏教語大辞典』,東京書籍, p.113
東原伸明(1988)「源氏物語と〈明石〉の力―外部 · 龍宮 · 六条院」 『物語研究』第二集, 新時代社, pp.219～226
日向一雅(1989)「源氏物語と異郷」『源氏物語の王権と流離』, 新典社, pp.176～183
藤井貞和(1979)「うたの挫折―明石の君試論―」『源氏物語及び以後の物語研究と資料』, 武蔵野書院, pp.71～74
三谷邦明(2002)「「山里」空間 · 境界空間からの眼差し―小野と宇治あるいは夕霧巻の不安と宇治十帖の多義性―」『源氏物語の言説』, 翰林書房, pp.229～232
三橋健(1983)「年中行事における禊 · 祓 · 物忌み」『日本民族研究大系第３巻』 国学院大学, pp.275～279
柳井滋(1969)「源氏物語と霊験譚の交渉」『源氏物語研究と資料―古代文学論叢第一輯―』, 武蔵野書院, pp.189～191

❖ 투고일 : 2006. 6. 30
❖ 심사일 : 2006. 7. 31
❖ 심사완료일 : 2006. 8. 11